

●二人で味わう古典和歌（44）

あしがら
足柄のをてもこのものにさすわなのかなるましづみ子ろ我れ紐解く

作者未詳

『万葉集』巻十四「相模の国の歌」より。相模の国（神奈川県）の相聞歌十二首中、冒頭の一首。巻十四は東歌が収録された巻である。

歌意は「足柄山のあちら側にもこちら側にも張り渡してある罨に獲物が引つかかって鳴り響く音、その間の静まるのを待って、かわいい子と私とは互いの着物の紐を解く」。息を潜めて罨にかかる獲物待つわずかな時間を利用して、野外で男女がコトに及んでいる場面を詠んだ歌だという。アラ大胆、と思われる方もいるかもしれないが、当時の庶民は家族全員で竪穴式住居（ワンフロア）に住んでいることがほとんどだったため、野外での性行為はごく当たり前のこと。

ただ「かなるましづみ」には二通りの解釈があって、右記の訳と、「……罨の音のように人の騒ぎが静まって（家



の者が寝静まって）から」という訳もある。つまり夜這いの場面であると。しかし私は断然、前者の解釈を推したい。獲物を罨にかけて捕えて食うこと、男女が交合すること。どちらも生きるための本能的な欲求である。しかもこの時代であれば、現代よりもその欲求は比べ物にならないほど切実だったはず。命懸けと言ってもいい。

「鳴り響く」の罨の仕組みについては想像するしかないけれど、獲物が必死にもがくので、きつとけたたましい音がしたのではないだろうか。その音の響きに神経を研ぎ澄ますことで、互いの高揚を身体全体でスリリングに交感し得たに違いない。

伊藤博積注『万葉集』には、「狩猟の収穫を祝う野外の宴などで唄われた即興の歌と見、（中略）野合の男女はかなる音にも神経を払うのが古今の常。本日の狩の素材や実態をとりこんで、男女のそういう心情を述べてはしゃいだのがこの一首だったのではなかるるか」とある。この歌が披露されたときの宴の盛り上がりようを想像すると笑えて、そしてなんだかときめく一首。

（小島なお）